

高等学校における漢文教育の再検討（続）

Reexamination how to teach Chinese classical literature and philosophy to high school students (2)

安 東 俊 六

ANDO Shunroku

一 はじめに

私は、かつて「高等学校漢文教育の再検討」において、概括的ながら高等学校の漢文教育の問題点を指摘し、更に教材を精選して高校生の学習意欲を高めるべきであるということ述べた。(注1)

しかし、平成11年3月29日に「高等学校学習指導要領」の改訂が行われ(以下、「新学習指導要領」と称する)、国語の場合は、科目は6科目、必履修科目が「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目となるなど、従来とは履修の枠組みが変わったことでもあり、また高等学校における漢文教育を取り巻く状況にも教育の実態にも、この10年間顕著な変化は見られないので、再度改めて「新学習指導要領」に基づき、高等学校における漢文教育について検討を加えてみたいと思う。

小論では、まず「国語総合」の漢文教育を取り上げて論じることにはしたい。6科目の選択の仕方によっては、「国語総合」が高等学校における最も教材量の少ない漢文教育となるからである。また紙幅の都合から、ここでは漢文入門のみを取り上げることにしたい。

二 「新学習指導要領」における「国語総合」の漢文の位置づけとその問題点

「新学習指導要領」において、「国語総合」での漢文の位置づけは、率直に言って全くなされていまいと、いい。

「新学習指導要領」では、

1 目 標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

と、目標が掲げられている。

ただしこの目標は、あまりに概括的で具体性がなく、高校生にどのように漢文を学ばせれば目標が達成できるというのか、明確でない。

そこで次に、以下の 2 内容・[言語事項]・3 内容の取り扱い において、この目標を達成するために、漢文ではどのような教材をどのように教えることになっているのか、見てみよう。

漢文に直接関わる記述としては、

[言語事項]

エ 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

3 内容の取り扱い

(4) 内容のCに関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安として、

生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること。

この二箇所のみである。

「新学習指導要領」の下では、漢文はこのわずかに二箇所の記述をもとにして、古文や近代以降の文章と同様に、先に掲げた目標を達成せねばならないわけである。しかしたったこれだけの記述で、教育の現場の教師は、果たしてそう易々と漢文を教えることができるのであろうか。また果たしてたったこれだけの記述に基づいて漢文を教えることによって、上掲の目標は達成できているのであろうか。ここで中学校における漢文の位置づけを見てみよう。もし平成10年12月改訂の「中学校学習指導要領」第2章 第1節 国語 において、漢文の位置づけが明確になされていれば、それを援用して「国語総合」の漢文教材を教えるという方法も残されていなくはないからである。

「中学校学習指導要領」の漢文に直接関わる記述は、

第2章 第1節 国語

第3 指導計画の作成と内容の取り扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(4) 第2の各学年の内容の「C読むこと」に関する指導については、次の事項に注意すること。

イ 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、わが国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにし、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること。

「中学校学習指導要領」の漢文に直接関わる記述も、わずかにこれだけである。

中学校における漢文の位置づけの曖昧さについてはすでに指摘したことであるので(注2)、重ねて詳述することは避けるが、これは国語教育における漢文の位置づけなどといったものではない。我が国の漢文教育の歴史や、中学生が漢文を学ぶ意義はどこにあるのかといった重要な問題までも、まったく無視した記述である。また今仮にこの記述に従うとして、現に「わが国の文化や伝統について」研究している国文学者や国史学者でさえも、漢文が達者に読める人は極めて少ないのが実情であるにもかかわらず、学者を目指すとは限らないごく普通の中学生が、「わが国の文化や伝統について関心を深める」ために漢文を学ぶ必要があるのなどということが、いったいどこで検証されたのであろうか。

このように「中学校学習指導要領」において、明解で的確な漢文の位置づけがなされていないにもかかわらず、更に「新学習指導要領」の「国語総合」の記述においても明確な漢文の位置づけがなされていないとすると、「国語総合」の漢文教育は、一体何をどのように教育するのか、まったく示されないままに教科書の編纂がなされ、検定がなされ、教育の現場では教師が手探りで授業をすることになっている、と言わざるを得ないのである。

三 「国語総合」の漢文の教材（漢文入門）

各社の「国語総合」漢文編が冒頭に置く漢文入門をみてみよう。

第一学習社『新編 国語総合』

漢文入門

訓読に親しむ (一)

- ・漢文を読むために 1 漢文の構造 訓読と訓点 返り点の種類と用法

訓読に親しむ (二)

- ・漢文を読むために 2 再読文字 助字 置き字 書き下し文のきまり
- ・漢和辞典の引き方

故事成語

五十歩百歩 (孟子)

矛盾 (韓非子)

狐借虎威 (戦国策)

第一学習社『高等学校 国語総合』

漢文入門

訓読に親しむ (一)

- ・漢文を読むために 1 漢文の構造 訓読と訓点 返り点の種類と用法

訓読に親しむ (二)

- ・漢文を読むために 2 再読文字 助字 置き字 書き下し文のきまり

故事三編

漁夫之利 (戦国策)

狐借虎威 (戦国策)

守株 (韓非子)

明治書院『新編 国語総合』

1 漢文に親しむ

訓読

故事 (守株 断腸 借虎威)

明治書院『精選 国語総合』

1 漢文入門

格言・成句

故事 (螳螂之斧 蛇足 苛政猛於虎也)

大修館書店『国語総合』

一 漢文入門

漢文を学ぶ

漢文訓読のきまり

格言

故事成語 矛盾 五十歩百歩 蛇足

大修館書店『新編 国語総合』

1 漢文のとびら

訓読のきまり

格言

古典を読むために ①<漢語の基本構造>

故事成語 [守株・推敲]

古典を読むために ②<漢字の意味>

教育出版『国語総合』

漢文入門

訓読の基礎

名言

訓読の知識

漢文コラム 1 漢字について

故事三編 (矛盾 借虎威 塞翁馬)

漢文コラム 2 漢文の構造

東京書籍『新編 国語総合』

1 漢文に親しむ

訓点

格言

故事 三編 守株 五十歩百歩 蛇足

漢文のしるべ① 訓読の基本

東京書籍『国語総合』(別冊古典編)

一 格言と故事

訓点

格言

漢文学習のしおり 1 訓読の基本

故事 矛盾 (韓非子)

推敲 (唐詩紀事)

苛政猛於虎也 (礼記)

漁夫之利 (戦国策)

漢文のしおり 2 置き字と再読文字

三省堂『高等学校 国語総合』(別冊古典編)

漢文に親しむ

五十歩百歩

○訓読のしかた

借虎威 — 戦国策 蛇足 — 戦国策

桐原書店『探求 国語総合』(別冊古典編)

1 漢文入門

訓読に親しむ I

訓読に親しむ II

再読文字・助字

演習

刻舟求劍

知音

塞翁馬

筑摩書房『精選 国語総合』(別冊古典編)

漢文入門

漢文を学ぶために

訓読入門 一

訓読入門 二

故事 朝三暮四

漁夫之利

塞翁馬

四 「国語総合」の漢文の教材(漢文入門)の問題点(1)

上に見るように各社の教科書ともに、漢文入門として訓読の仕方と故事成語とを取り上げている。まず始めに、訓読の仕方という教材について考えてみよう。

訓読の仕方については、中学校の教科書で精粗の違いはあっても何らかの形ですでに触れられている。それを「国語総合」で改めて取り上げるのは、更に詳しく教えようとするものであろう。

しかし、中学校でごく初歩的な訓読の仕方を教え、高等学校で更に詳しく訓読の仕方を教えるという場合には、中学校・高等学校における漢文教育を一貫したものとして考え、たとえこの中学校どこの高等学校がどの出版社のどの教科書を使用したとしても、必ず整合して連続したものとなっていなければならない。果たして現状はそうなっているのだろうか。

ところでその前に、漢文教育に関わる更に重要な問題は、今日の社会の状況において、そもそも「国語」で、中学生が訓読の仕方を学ぶ必要があるのだろうか、また高校生が訓読の仕方を学ぶ必要があるのだろうか。このことについては、中学校における漢文教育について論じた際に既に論じたことであるけれども(注3)、重要なことであるので、ここでも重ねて強調して論じておきたい。

私は教育学部で漢文学を担当している。私が漢文学の担当者であることを知った世間の人達からは、これまで実に何度となく、「漢文はなぜひっくり返って読むのですか」という奇妙な質問を受けてきた。最初は私の聞き誤りではないかと思って聞き返したこともある。しかし決してそれは私の聞き誤りではなかった。そこで中学校・高等学校の「国語」の免許を取ろうとして私の講義を受けている学生に、「漢文はなぜひっくり返って読むのか」と質問してみた。その結果は私にとって全く意外なものであったが、明快に答え得た学生は決して多くはなかった。この調査から後は、大学の講義であるにもかかわらず、「漢文はなぜひっくり返って読むのか」というこのごく初歩の話を、講義のどこかに挟むように私は心がけてきた。

漢文に関しては、ことはかくのごとく、今日の社会では初歩の初歩からして大半の人に身に付いていないというのが実状である。であればその現実を踏まえて、極めて少ない授業時数で極めて限られた教材しか学ぶことのできない状況の下で、そもそも中学生が訓読の仕方を学ぶ必要があるのか、あるいはまた高校生が訓読の仕方を学ぶ必要があるのかという原初の問題からして、問い直す必要があるのである。

中学校の漢文教材が極めて限られていること、漢文に割り当てられている授業時数が極めて少ないことは、周知のとおりである。このこと自体は、「中学校学習指導要領」に定められた「国語」の授業時数が、第1学年140時間、第2学年105時間、第3学年105時間という状況の下では、致し方のないことといえる。しかし、授業時数が少なく教材が限られているからこそ、中学校の漢文においては何を教材とすべきか、その精選が求められるのである。このことは高等学校の「国語総合」においても全く同じである。「国語総合」の標準単位数は4である。したがって50分の授業が140単位時間行われるわけである。小論は紙幅の都合で「国語総合」のすべての教材を一覧にして示す余裕がなかったが、上に示した漢文入門の教材に割り当てられる時間も、全体から見れば極めて限られたものとならざるをえない。

したがってここで、漢文の教材に割り当てられ得る限られた授業時数の下での教材の精選を、真摯に追究しなければならない。すなわち何を重視して何は割愛するのか、改めて教材の優先すべき順位を検討し、中学校・高等学校の段階で訓読の仕方を学ぶ必要があるのかということを、判断せねばならないのである。

先に私は、「漢文はなぜひっくり返って読むのか」という話を、大学の講義であるにもかかわらず、講義のどこかで挟むように心がけていると述べたが、それは現状を踏まえて行っていることであって、

大学でこのような講義をしなければならないことは、悲しいことであると思っている。しかし私の講義を聴く学生は、中学校・高等学校の「国語」の免許を取得して教壇に立つ人達であるから、私のする講義は、理論的な批判は行いえても、現状を無視することはできない。したがって現在用いられている教材を活かして成果を挙げる工夫や、補助教材を精選することに多くの時間を割くことにしている。しかしかねてより、どの時期にどの程度まで訓読の仕方を教えるかという問題については、厳密な検討を加えるべきであると考えてきた。

結論から先に言うならば、訓読の仕方は、中学校においては学ぶ必要がないのではないかと考える。また高等学校においても、訓読の仕方を学ぶ必要はないのではないかと、私は考える。

何故ならば、漢文の訓読の仕方は、我々の日常生活における必要度からみた場合に極めて低く、教育の基幹たる義務教育の中学校において学ばなければならないほどの重要事ではないと考えるからである。中学校の漢文では、訓読の仕方などよりももっと力点を置いて学ぶべき基礎的で重要なことが数多あって、限られた少ない授業時数はその学習にこそ使われるべきであろう。このことは高等学校においても同様である。漢文の訓読の仕方を習得しておいたほうが将来役立つという人が、いったい我々の社会にどれ程いるであろうか。仮に大学で中国文学や中国哲学、中国史を専攻したとして、高等学校までの限られた時間で習得した知識や訓読の技術は、ほとんど役に立たないに近かろう。私の経験を顧みても、専攻に進んでからの演習は漢文の訓読が主であったが、高校までの知識や多少読める程度の訓読の技術は、ほとんど役に立たなかった。演習で『楚辞集註』などを訓読することは、第二外国語の習得以上に労力を要したことを今でも記憶している。私の例を一般論だというつもりはないが、高等学校までに学んだ漢文の訓読の技術は、中国学を専攻する者にとってはあまりに初歩的で役に立たない。そうかといって、中国学を選択しない人達にとって何か役に立つことがあるかといえば、それも皆無で、恐らく訓読の技術は生涯まったく無用に近いものではなかろうか。私と同年輩の人達も、振り返りのつけ方を一所懸命に覚えたことを思い出話でする人はあっても、その後何かの役に立ったなどという話は聞かない。

ところで、先に引いた「漢文はなぜひっくり返って読むのか」という笑えない愚問が発せられるのは、何故であろうか。その問いを発した人が漢文を熱心に学習しなかったからだとして、片付けてしまうことは勿論できない。何故ならば私にその問いを発した人の多くは、教育に携わっている人達であって、この問題は安易に看過できるものではない。そもそも漢文は、いかに「国語」の教材であろうとも、中国語の古典語で書かれた詩や文章であることに間違いはないのである。しかしその初歩的な認識を植えつけることすら、現在の漢文教育はできていないという厳然たる事実を、我々国語教育に携わるものは眼を見開いて見、受け入れるべきであろう。

ここで今一つ、笑えない例を挙げておかなければならない。これもすでに指摘したことであるけれども(注4)、『高等学校学習指導要領解説 国語編一』(平成11年12月・文部省)の第2章 国語科の科目・第5節 古典・2目標の解説の「また、古典としての漢文は、我が国の古典として享受されてきた漢文を指し、日本人の手になる漢文すなわち日本漢文も含んでいる。」という記述である。ここに言うように我が国が漢文を長く享受してきたことは、間違いのない事実である。しかし漢文を如何に長く我が国が享受しようとも、漢文はあくまでも中国の古典であって、日本漢文以外は日本の古典にはなりえない。それをこともあろうに『高等学校学習指導要領解説』が、このように笑えない誤った記述を安易にするとともに、今日の高等学校における漢文教育が如何に実を結ぶようになされていないかということを、如実に物語っているといつてよいであろう。

中学校でも高等学校でも漢文の訓読の仕方を学ぶことになっているにもかかわらず、「漢文はなぜひっくり返って読むのか」という問いが発せられるということは、中学校・高等学校で学ぶ漢文の訓読の仕方の学習が単に技術のみに走って、先人達が中国の古典語を日本語の語順で読むために編み出した偉大なる工夫であるという肝心な点は、学んでいないということであろう。こうした結果を生む

ほどに効果の上がないものであれば、訓読の技術的な学習は止めて、書き下し文を主にした漢文訓読調の古文によって、内容を読み取ることに重点を置くほうが、中学生・高校生にとって遥かに有益ではなからうか。

将来中国文学や中国哲学、中国史を専攻することになる生徒にとっても、訓読の技術を中学校・高等学校で学んでいないことは、決定的に不利であるということにはならない。先にも述べたように、専攻生にとって必要とされる漢文を読む力は、高校までに身につけた訓読の技術くらいでは役に立たないというに近く、専攻して後に本格的に訓読の技術を身につけたとしても、決して遅くはない。訓読の生半可な技術の習得よりも、書き下し文によって内容を深く理解する力を養っておくことのほうが、将来の研究生活に更に有益であるといえる。

この節の初めに指摘した、中学校・高等学校における漢文教育を一貫したものとして考え、たとえ中学校と高等学校でどの出版社のどの教科書を使用したとしても、必ず整合して連続したものとなっていなければならないはずである、という点についてみてみよう。これは既に中学校の教科書の取り上げ方に精粗があると述べたように、高等学校の「国語総合」の教科書の取り上げ方にも精粗があって、決してどの出版社のどの教科書を使っても連続して整合性があるなどということはいえない。したがって現状では大いに問題があるということ、強調して指摘しておきたい。

五 「国語総合」の漢文の教材（漢文入門）の問題点（2）

この節では、故事成語の教材について検討してみたい。故事成語の教材を検討するに当たっては、(1) 中学校の教材との重複 (2) 故事成語によって何を学ぶべきか の二項目に焦点を絞って検討してみたいと思う。

(1) 中学校の教材との重複

実は漢文の教材において、中学校の教材と高等学校の教材とに多くの重複がみられることは、故事成語に限ったことではない。ここではまず故事成語の重複の実態を見てみよう。

五十歩百歩は、教育出版『伝え合う言葉 1』で蛇足と矛盾を引いた後ろの学習の手引きに、また三省堂『現代国語 1』でも「矛盾 - 故事成語」と題する文章中に採られている。

矛盾は、三省堂『現代国語 1』でも「矛盾 - 故事成語」と題する文章に、また東京書籍『新しい国語 1』では書き下し文で採られている。

狐借虎威は、教育出版『伝え合う言葉 1』で蛇足と矛盾を引いた後ろの学習の手引きに採られている。

漁夫之利は、教育出版『伝え合う言葉 1』で蛇足と矛盾を引いた後ろの学習の手引きに採られている。

守株は、教育出版『伝え合う言葉 1』で蛇足と矛盾を引いた後ろの学習の手引きに採られている。

蛇足は、教育出版『伝え合う言葉 1』で矛盾とともに引かれ、学校図書『国語 1』の「故事成語」と題した文章の後ろの学びの窓にも、三省堂『現代国語 1』の「矛盾 - 故事成語」と題する文章でも採られている。

推敲は、教育出版『伝え合う言葉 1』で蛇足と矛盾を引いた後ろの学習の手引きに、学校図書『国語 1』の「故事成語」と題した文章の後ろの学びの窓にも、三省堂『現代国語 1』の「矛盾 - 故事成語」と題する文章にも、光村図書『国語 1』の「今に生きる言葉」と題する文章にも採られている。

塞翁馬は、光村図書『国語 1』の「今に生きる言葉」と題する文章に採られている。

重複の調査の枠を狭く故事成語に限らずに、上掲の教材の一覧で格言とか訓点となっているものまで広げれば、更に重複の例は増える。

大器晩成、不入虎穴不得虎子、歲月不待人、百聞不如一見、少年易老学難成は、いずれも光村図書

『国語 1』の「今に生きる言葉」と題する文章に採られている。

また三省堂と東京書籍とは、自社出版の中学校・高等学校の教科書においても重複がみられる。

勿論「国語総合」では訓点が付された文、中学校では書き下し文や語のみという少しの違いはあるけれども、これほど多くの重複が見られるというのはどういうことであろうか。このように多くの重複が見られる根本的な原因は、改めて言うまでもなく、中学校では何をどこまで学ぶべきか、高等学校では何をどこまで学ぶべきかが、「中学校学習指導要領」にも「高等学校学習指導要領」にも明確に示されていないからであろう。

(2) 故事成語によって何を学ぶべきか

先にも「新学習指導要領」を引いて確認したように、「国語総合」においては、漢文の位置づけは全く行われていない。したがって我々は、「国語総合」においても、故事成語の教材から高校生はいたい何を学ぶべきであるのか、そもそも中学校で既に学んだ故事成語を重ねて高等学校でも学ぶ必要があるのかという所から、検討を始めなければならない。

周知のとおり、故事成語は教材としてすでに小学校で取り上げられており、上にみたように中学校の第1学年でも古典の導入として取り上げられている。そしてまた高等学校の漢文の入門としても取り上げられ、上に見たように多くの重複が見られるのである。

ここでもまた結論を先に言えば、高等学校の「国語総合」の漢文入門で故事成語を取り上げる必要はないのではないかと、私は考える。

繰り返し言うことになるけれども、中学校においても高等学校においても、生徒たちが漢文を学ぶ時間は極めて少なく、最も基礎的で重要なことさえ習得し得ていないのが実状である。こうした厳しい状況の下にありながら、既に中学校で学んだ同じ教材を重複して学ぶという非効率的な学習をしている余裕など、高等学校ではないはずである。

既に論じたように(注5)、今日の我々の日常生活の中には故事成語が多く用いられていて、会話や文章での使用は勿論のこと、掛け軸や額、石碑で故事成語を常に目にしている。中学生が古典の導入として故事成語を学ぶことは、現行の「中学校学習指導要領」の「国語」の目標にも合致するものであり、五社の「国語」の教科書も目標に沿うように工夫を凝らしている。したがって教材の選択にある種の配慮をしさえすれば、中学校で故事成語を古典の導入として学習することは、中学生にとって十分に意義のあることである。

しかし、高等学校の「国語総合」の漢文入門として重ねて故事成語を取り上げた場合に、中学校の故事成語の学習に何か新たに付加された意義というものが見出せるであろうか。残念ながら現状では訓読の練習が加わったという以上のものはなく、新たな意義は全く見出せない。また「国語総合」で取り上げている故事成語や格言・名句といった教材は、高校1年生でなければ理解できないものではなく、中学1年生でも十分に理解の可能なものばかりである。中学1年生でも理解可能であるからこそ、上に見たように多くの重複が生まれたのであろう。さすれば高等学校の「国語総合」で重ねて故事成語を取り上げることは、止めるべきではなかろうか。

六 中学校・高等学校を通した教材の適切な配置

既に、中学校・高等学校において訓読技術の習得は止めてはどうか、高等学校における故事成語の再学習は止めてはどうか、という二つの提案をしてきた。したがって次にこの二つの提案を加味して、中学校・高等学校を通した教材の再配置を検討してみなければならない。

まず始めに、中学生・高校生が漢文を学ぶ意義を確認しておこう。中学生・高校生が漢文を学ぶ意義は、言うまでもなく、中学生・高校生が日々生活している今日の我々の社会の基本的なものの考え方がそこにあるから学ぶということであると、私は考える。

日本の歴史を見ても、かつて先人たちが漢文から多くのことを学んできたことは事実であり、教育

の歴史から見ても、漢文から学んだ成果を活用してきたことは事実である。現在の学校教育の原形ともいべき江戸時代から明治初年までの藩校や私塾の教科内容は、漢文そのものであったといつてよい。また明治初年の通達によって創設の始まった小学校も、創設の精神は人づくりであり、教師の多くは漢学の素養を持つ人達であった。教科の内容や教科書については既に多くの研究の成果があるので、改めてここで概説するまでもあるまいが、小学校の教師は大半漢学の素養を持つ者、殊に地方では漢学の素養を持つお寺の僧侶が兼任するのが一般的であった。勿論上級の学校に進めば漢文の学習も今日の比ではなく、多くの時間をかけて行われたのであって、その内容は現行の「中学校学習指導要領」のような言葉の問題に限定せず、広く人としての生き方に深く関わる教育内容であった。

今日の漢文の故事成語・思想・史伝・文学の四領域は、かつての人づくりを目指した漢文教育の時代と寸部も変わってはいない。領域はそのままに教材の分量と学習時間数とを、縮小に縮小を重ねたに過ぎない。そうであるにもかかわらず、何故であろうか、「中学校学習指導要領」は漢文を学ぶ目的を「わが国の文化や伝統について関心を深めるようにすること」にしてしまった。そして結果としてそれに基づく教育が目標を達成しえているかといえば、これまで縷々述べてきたように、決して目標を達成しえてはいないのである。やはりここで漢文教育の成果を挙げるためには、中学生・高校生が漢文を学ぶ意義を、「中学校学習指導要領」でも「高等学校学習指導要領」でも、明確に記すことが必須の要件として要求されるのである。私は先に述べたように、今日の中学生と高校生とが漢文を学ぶ意義は、中学生・高校生が日々生活している今日の日本の社会の基本的なものの考え方がそこにあるからであると考え。

では私の主張に基づいて、教材の再配置を試みればどうなるのか、示してみよう。

中学校第1学年では、故事成語を取り上げる。従来五社の教科書が取り上げたように、「中学校学習指導要領」に従って、言葉の問題の延長として扱うが、小学校における教材との違いは明確にしておく必要がある。

中学校では、我々の日常生活に多くの故事成語が用いられていることに改めて目を向けさせるとともに、何故に今日の生活にこれほど多くの故事成語が使われているのか、歴史的な視点に立って考えさせるべきであろう。いうまでもなく我々の先人達は、故事成語から多くの人生訓を学んできた。したがってそのことを十分に視野に入れて、教材の選択を行わなければならない。上に引いた現行の教材に見られる「五十歩百歩」・「矛盾」・「狐借虎威」・「漁夫之利」・「守株」・「蛇足」は、人生経験を多く積めば必ず得心のいく味わい深い至言である。しかし人生経験の浅い中学1年生のどれほどが、これらの故事成語の味わい深さを理解するであろうか。悪くすると中学1年生には笑い話と受け取られ冷笑を買いかねない。中学1年生に笑い話として冷笑を買ったのでは、先人達が長く故事成語を学んできた意味も理解されず、古典の導入としての意味も持たない。現行の教材で言えば、「推敲」や「塞翁が馬」のように誤解される恐れがなく、中学1年生でもなるほど得心のいくような故事成語を選び採るべきである。

中学校第2学年では、『礼記』を取り上げる。中学2年生は、幼い頃からこうすることは行儀が良いこと、こうすることは行儀が悪いことと、躰けられてきた。しかしそれが何に基づいて良いとされ、何に基づいて悪いとされるのか、その基づくところは学んでいない。また学校生活でも起立して発言することを習慣づけられてきた。しかしそれも何に基づいてそうするのかは学んでいない。こうした身近で基本的なことを明確に知るために、これらに関わる『礼記』曲礼篇の文章を読むことは、意義のあることであろう。

中学校第3学年では、第2学年に引き続いて思想の教材として『論語』を取り上げる。『論語』の数章を採るのは、いうまでもなく『論語』に書かれていることが、現に中学3年生の日々の生活の中に生きているからである。また今から2500年も前に、既にどのように生きることが人間らしい生き方であるのかを深く追究した人達がいたということを知ることは、意義があるからである。ただし『論

語』を教材として採る場合には、修己に関わる章を採るべきで、治人に関わる章は避けるべきであろう。

「国語総合」では、思想の教材としては『論語』『莊子』『墨子』を、史伝の教材としては『史記』を、文学の教材としては、詩と文を取り上げる。

思想の教材として重ねて『論語』を取り上げるのは、中学校での学習量ではあまりにも少ないからである。勿論現行の教科書のように中学校で取り上げたものと重複させることは避け、中学校と同様に修己に関わる章を採るべきであろう。中学校においても高等学校においても「国語」の漢文は、儒家の思想そのものを学ぶことを目的とすべきではなく、もっと中学生・高校生の日常の生活に即した学習内容にすべきであろう。したがって政治家を目指すはずもない一般の中学生や高校生が学ぶ「国語」で、治人に関わる章を採る必要はなく、むしろ避けるべきであると考え。また『莊子』を取り上げるのは、とかく相対的価値観に囚われて心の自由を失いがちな高校生が、『莊子』の絶対的な心の自由の獲得を説く文章を読むことは、意義のあることであると考えからである。現行の「国語総合」の教科書では、『墨子』に教材を採ったものは見られない。しかし今日の社会の他人の集団の論理は、既に『墨子』の中に見えていて興味深い。高校生は家族内における肉親愛を基盤とした論理と、家庭の外の他人の集団の論理との並存の中で日々生きている。したがって『墨子』に見られる他人の集団の論理を学ぶことは、意義のあることといえよう。

史伝の教材として『史記』を取り上げるのは、見事な生き方をした先人の実例がふんだんに載せられているからである。『史記』では何も項羽本紀の四面楚歌などを取らなくても、今日の高校生の生き方に充分に参考になる実例が、列伝中にいくらかもある。こうした優れた生き方の実例を読むことは、人生の方向付けをしつつある高校生にとって意義のあることであろう。

文学の教材として詩と文を取り上げるのは、今なお高校生の身近に漢詩や文章が日常的にあるからである。美術館に行けば書の展示室で額や軸で漢詩や文章を目にし、家庭でも額や軸で漢詩や文章を目にしている。また故事成語と同様に、日本人がかつて長く漢詩や文章に親しみ学んできたことを、歴史的な事実としても学ぶべきだからである。ただ漢文でいう文学の概念は、今日の高校生の持つ文学の概念とは違う。このことは高校生に明確に理解させなければならないが、概念の違いはあっても、先人達が漢文の文学作品の湛える深い精神性に共感し、愛読し続けてきたのは事実である。したがって今日の高校生にとっても、こうした作品群の一端に触れることは意義のあることであろう。

今後、「国語総合」の思想・史伝・文学の教材については、更に一つ一つ詳細に論じて試案を示さなければならないが、先ずはこのように中学校と高等学校の漢文の教材を一貫したものと考えて、再配置してみてもどうであろうか。

注1 岐阜大学「カリキュラム開発研究センター研究報告」(Vol.14 No.3, 1994年)

注2 拙稿「中学校における漢文教育の再検討」(「岐阜大学国語国文学」第26号, 1999年3月)を参照願いたい。

注3 注2に同じ。

注4 拙稿「中学校における漢文教育の再検討 (五編)」(「岐阜大学教育学部研究報告=人文科学=」第52巻2号, 2004年3月)を参照願いたい。

注5 拙稿「中学校における漢文教育の再検討 (三編)」(「奈良教育大学 国文-研究と教育」第26号 2003年3月)を参照願いたい。